台大日本語文研究第 11 期
2006 年 6 月，頁 187-212
本文 2006.4.26 收稿, 2006.6.28 通過刊登

日本「桃太郎」傳說故事的原像

葉漢鰲*

摘要

「桃太郎」故事，是日本家家戶曉的傳說故事，也是日本古來最有名的五大傳說故事之一。有關其起源，已有很多的學者以此爲題，從事研究。其中尤以柳田國男的『桃太郎的誕生』及石田英一郎的『桃太郎之母』等爲最具代表。柳田國男稱“擁有靈異的小童神，來臨，賜福德”爲「童子物語（小さ子物語）」，是日本古來傳說故事的最喜愛題材，「桃太郎」故事即其典型。石田英一郎則指說：水神往往以童子之形現身，在中國也常見，此「桃太郎」故事的背後，存著有世界共通的母子神信仰。本論文異於以往觀點，從另一個角度，通過與中國古來的儺文化、特別是辟邪信仰的比較，以探討「桃太郎」故事的起源與真諦。

眾所周知，「桃太郎」故事的人物構成，是以主角的桃太郎、配角的狗、猴子、雉雞、以及鬼島的眾妖（鬼）所成。「桃太郎」意謂著甚麼？狗、猴子、雉雞、及鬼島的眾「鬼」又有何意？其結論，「桃太郎」傳說故事整體說來，可說是由驅邪、趕鬼信仰意識下，文藝化、所發展出來的作品。

關鍵詞：桃太郎、童子物語、儺文化、辟邪信仰

* 大葉大學應用日語系助理教授

The original outline of “Momotaro”

YEH Han-ao*

Abstract

The story of momotaro is the most home known for everyone, and is one of the five most famous stories. Many scholar have focused on when it origins and researched for it. “The birth of Momotaro” and “The mother of Momotaro” of Yisidaeiyitu are the two representatives. Ynagitakunio names “the kid god possess magic power comes and give blessing” as “little man story”, which has been the most famous story since before, and “Momotaro” is the stereotype of this kind of story. Yisidaeiyitu says, ”The God of water will show up as a kid. Besides, he often appears in the same way in China. The universal belief of parental god exists behind the story of Momotaro. Based on the ancient “nwow”, especially the culture of ghost-preventing. This thesis will discuss the origin and truth from another perspective which is different from the past.

As we know, the story consist of Momotaro, the dog, the monkey, the chicken and the ghosts on the ghost land. What does “Momotaro” means? And what do the dog, monkey, chicken and the ghost stand for? In conclusion, on the whole, the story is under the cognition of development of ghost preventing.

Key words: Momotaro, little man story, nuoculture, belief of ghost-preventing

* Assistant professor of the Department of Applied Japanese Language, Da-Yeh University

昔話「桃太郎」の原像

葉漢鰲*

要旨

桃太郎の話は日本のもっとも有名な昔話であり、古来の五大昔話の一つに数えられる。その誕生について、これまでも多くの学者が研究テーマに取り上げている。そのうち柳田国男の『桃太郎の誕生』や石田英一郎の『桃太郎の母』などはよく知られている。柳田はこのような霊験をもつ小童神が訪ねて福徳をもたらすものを「小さ子」物語と呼び、日本古来大変好まれたモチーフで、桃太郎はその典型だとする。石田は水神が童形をとることは中国でもよく見られ、この物語の背後に世界的に共通な母子神があると指摘している。本論は従来の視点をかえ、中国古来の儺文化、特に辟邪信仰と比較しながらその物語の起源をたどって考察してみたい。

周知の通り、桃太郎話の人物構成は、主役の桃太郎と脇役の犬、猿、雉、それから敵役の鬼が島の鬼からなる。なぜ、桃太郎なのか、なぜ、犬、猿、雉なのか、及び鬼が島の鬼にどんな意味があるのか、結論を先に言えば、桃太郎の話は全体的に言うと、魔除け、厄払いなどの意識をもとにして文芸化された作品だろうと思われるのである。

キーワード：桃太郎、小さ子物語、儺文化、辟邪信仰

* 大葉大学応用日語学科助理教授

昔話「桃太郎」の原像

葉漢鰲

一、はじめに

桃太郎の話は日本のもっとも有名な昔話であり、古来の五大昔話（花咲爺、かちかち山、舌切雀、猿蟹合戦）の一つに数えられる。通説では、その話は室町末期にすでに成立していたとするが、一般に知られるようになったのは江戸時代半ばごろからである。さらに、この話は明治期に入って軍国主義、民族意識や国民意識などの高まりを鼓吹するに流用され、ついに国定国語読本や唱歌教材にも掲載されるに至って、伝承国民説話として世間に広まった。その話は『標準於伽文庫』の『日本童話』上巻（大正九年刊）[1]によると、次のようである。

ムカシ　ムカシ　アルトコロニ、オジイサントオバアサンガイマシタ。毎日オジイサンハ　山ヘ　柴カリニ、オバアサンハ川ヘ　センタクニ　行キマシタ。アル日　オバアサンガ　川デセンタクヲ　シテイマスト、川上カラ　大キイ桃ガ　一ツ

ドンブリコッコ　　スッコッコ

ドンブリコッコ　　スッコッコ

ト　ナガレテ　来マシタ。オバアサンハ　手ヲ　ウチナガラ、

アッチノ　水ハ　カライゾ、

コッチノ　水ハ　アアマイゾ。

カライ　水ハ　ヨケテ来イ、

アマイ　水ヘ　ヨッテ来イ。

ト　ウタイマシタ。スルト　ソノ　桃ハ　ダンダン　オバアサンノ　方ヘ　ヨッテ来テ、オバアサンノ　前デ　トマリマシタ。オバアサンハ　ウレシソウニ　ヒロイ上ゲテ、

「コレハ　ミゴトナ　桃ダ。オジイサント　ワケテ　タベヨ

[1] 森林太郎等編　東洋文庫 233『日本お伽集 2 神話・伝説・童話』、平凡社

ウ。」

ト、キモノト　一ショウニ　タライノ　中ヘ　入レマシタ。ソシテ　タライヲ　カカエテ　ウチヘ　カエリマシタ。

シバラクスルト、オジイサンハ　柴ヲ　セオッテ、山カラ　カエッテ来マシタ。

「オバアサン、今　カエッタヨ。」

「オジイサン、待ッテイマシタヨ。早ク　上ヘ　オ上リナサイ、イイ　モノヲ　上ゲマス。」

オジイサンガ　ワラジヲ　トイテ　上ニ　上リマスト、オバアサンハ　戸ダナノ　中カラ　桃ヲカカエテ来マシタ。オジイサンハ　一目　見テ、大キイノニ　オドロキマシタ。

「コレハ　メズラシイ。ドウシタ　桃ダ。」

「今日　川デ　ヒロッテ来タノデス。」

「ナニ、川デ　ヒロッテ来タ。ソレハ　フシギダ。」

ト　オジイサンハ　大ヨロコビデ、桃ヲ　手ニ　取リ上ゲヨウト　シマシタ。スルト　桃ハ　ポント　二ツニ　ワレテ、中カラ　カワイイ　男ノ　赤チャンガ、手ヲ　ヒロゲナガラ　トビ出シマシタ。オジイサンモ　オバアサンモ　ビックリシマシタ。ケレドモ　前カラ　子ドモガ　一人　ホシイ　ホシイト　思ッテイタ　トコロデシタカラ、二人トモ　大ヨロコビデシタ。オバアサンハ　スグニ　赤チャンヲ　ダキ上ゲテ、ウブユヲツカワセマシタ。赤チャンハ　イキナリ　オバアサンノ　手ヲハネノケマシタ。

「マア、何トイウ　ツヨイ　子デショウ。」

「ホントニ　元気ノ　イイ　子ダ。」

ト、オジイサント　オバアサンハ　カオヲ　見アワセテ　ニコニコ　笑イマシタ。ソシテ　桃ノ　中カラ　生レタノダカラトイッテ、桃太郎ト　名ヲ　ツケマシタ。

上述は、桃太郎の「異常出生譚」を語るのであり、その次に桃太郎が成長後、大変な力持ちになり、ちょうどその時、鬼が島に住ん

でいる鬼が偶々海を渡って村にやってきて物を取ったり、人を殺したりしたので、桃太郎はその鬼が島の鬼を征伐することに決心した。それで兵糧としてのきび団子を携えて鬼退治に出かけ、途中、ぶち犬と猿と雉に出会い、家来として彼らを連れて鬼が島へ赴いた。このように三人の協力をもらった桃太郎はついに鬼が島の鬼たちを降伏させて多くの宝物を分捕って凱旋したという。

桃太郎の話は、地方によって多くの異なった伝承が伝われている。前述のようなストーリーは明治以後一般に流布して定着した、いわゆる「標準御伽の桃太郎」であった。ほかに「川上から流れてきた桃を拾い上げたお婆さんがこれを食べたところ、若返って【桃太郎】を生んだ」、いわゆる「回春型」の話もあれば、成長後の桃太郎が鬼が島へ鬼退治に行かずに嫁探しや地獄へお姫様を救いに行って、大変な金をもって長者になるなど、多様なバリエーションがある。本論は主に従来の「標準型」をもとにして、中国の伝統民間文化といかに関わりをもつかを考えてみたい。

二、従来の桃太郎話についての研究

桃太郎伝説は日本の有名な昔話であり、これまでも多くの学者が研究テーマに取り上げている。その中に特に柳田国男氏の『桃太郎の誕生』や石田英一郎氏の『桃太郎の母』などがもっとも代表的な論文である。

柳田説は、古く信仰の霊験をもつ小童神が尋ねて福徳をもたらすようなものを「小さ子」物語とよび，しかも古来大変好まれたモチーフで、桃太郎はその小さ子信仰との関連から固有信仰のもとに生まれた昔話であるとした。さらにその話の原型は重要な「妻覓ぎ」があったと指摘した。

> たとへば遠征の目的の如きも、日本の昔話の方はやはり単純化して居る。西洋の「桃太郎」たちの大旅行は必ずしも財宝を持って還るという為ばかりで無かった。寧ろそれを手段としてよき配偶者とよき家を得、さらに佳き児を儲けて末永く栄えんと

して居るのである。我々の側でも瓜子姫だけは、この幸福なる婚姻を以て結末としているものがあるが、あちらでは男性の冒険者も、同じくその珍しい宝物を持って来て、終に王様の婿となった話が多いのである。察するに近代の桃太郎は子供を主人公にしたというよりも、寧ろ子供にのみ聴かせる話であった為に、計画を以てこの重要なる妻覓ぎの一条を省いたのであった。奥州民間の桃の子太郎といふものには地獄から手紙を持って烏が来たので、此遠征を思ひ立ったといふのがある。さうして黍団子を携へて行って地獄の門番の鬼を懐柔し、地獄のお姫様を連れて逃げて来る[2]。

と言っている。また、

日本の小さ子説話が、最初小さな動物の形を以て出現した英雄を説き、又は奇怪なる妻問ひの成功を中心に展開して居るということは、それが右申す神人通婚の言ひ伝への、まだ固く信じられて居た時代に始まって居る証拠として、我々に取っては可なり大切な要点であった。然るに其点を所謂標準御伽の桃太郎のみが、何の考へも無く取除いてしまって居たのである[3]。

と述べたように妻求めの話はもっとも古い形と考えた。

石田氏は、基本的には柳田説をふまえ、水神が童形をとることは中国にもよく見られ、物語の背後には世界的に共通な人類太古の大地母神信仰があると指摘している。

桃太郎の誕生について、近年野村氏はすぐれた研究業績をあげている。『昔話採集手帖』に

父と母が花見に行き、弁当を食べようと憩んでゐると、桃が一つ母の腰もとに転がってくる。母が拾って帰り綿にくるんで寝床におくと、桃が割れて子供が生れる。桃ノ子太郎と名づける。父母が畠に出た後に留守して勉強してゐると、背戸の柿に木に鴉が来て地獄から手紙を持って来たと鳴く。手紙には鬼から、

[2] 柳田国男（1962）『定本柳田国男集　第八巻』p、22　筑摩書房
[3] 同上、p、25

日本一の黍団子を持って来てくれと書いてある。彼は父母に黍団子を拵へて貰ひ地獄へ行く。門を叩くと鬼どもが出て来て黍団子一つ御尤といふ。一つづゝやると鬼はそれを食って酔って寝る。その間に桃ノ子太郎は地獄のお姫様を車に乗せて逃げる。鬼が目を醒して火車で追かけるが、もう海へ行ってゐる。彼はお姫様を無事つれ帰る。これがお上に聞え金を貰ひ、長者になる[4]。　（岩手県紫波郡・紫波郡昔話）

という話に基づいて柳田氏の、ほとんどの桃太郎からいわゆる「妻覓きの冒険譚」が脱落した説に対し、氏は

話は結局は「所謂標準御伽」以前のそれではなくして、その地における〃鬼むかし〃の一種であり、そこでの主人公は何もそれが「桃太郎」でなくてもよかった。すなわち、すでにみてきたように「桃ノ子太郎」でもあってもいっこうに差し支えなかった、ということは、何を隠そう、理屈としては「地獄の鬼ども」に立ち向かう勇者として、その名には単に「桃太郎」がふさわしかっただけであった。話本来の筋に直接関係なく「桃太郎」は後付けの理由から添えられた、いわば単なる記号としての命名に過ぎなかったと考えられるからである[5]。

というように異を立てた。さらに草双紙『再板 桃太郎昔話』(『初期草双紙集成　江戸の絵本Ⅳ』所収、国書刊行会、一九八九年六月)、黄表紙『新板流風桃太郎手柄噺』＜鳥居清経画＞、高松市歴史資料館蔵『桃太郎絵巻』高嵩渓作などの資料をあげ、「桃太郎」は妻覓きを目的とした話ではなく、男の子の健やかな成長への祈り、または子供の魔よけ、もしくはその撃退といった呪的な機能を込めて語り継がれた話で、金太郎、力太郎、寝太郎などの繋がりが深いという[6]。

その他に、桃太郎の「桃」についてはこれまでも多くの研究が重ねられ、優れた業績をあげている。その主な説を王秀文氏の纏めによると、

---

[4] 佐々木喜善（1926）『郷土研究』「陸中紫波地方の桃太郎」第四巻第九号
[5] 野村純一（2000）『新・桃太郎の誕生』p、90　吉川弘文館
[6] 野村純一（1998）『昔話の森』大修館書店

一、桃の花·葉·実をもって、女性の結婚·多産に結びつける説。特に桃の実の形が女陰に似ているためであると主張する説が多い。これは、主に『詩経』の詩「桃夭」の意味についての理解と解釈に基づいたものである。

二、桃の花や実の色が明るく華やかで、吉祥のものと考えられやすい性質を持っているところから、古典の諸儀式や年中行事にみえる辟邪や治病の観念が培われたとする説がある。

三、度朔山伝説や道教の経典にみられる桃の巨大な木から、桃が天地の中央にあり、宇宙の軸として現世と超越的な世界とを結び世界樹の機能を持っている、あるいは、陶淵明の『桃花源記』などにある桃林の役割から、桃が別世界との通路であるとの説がある。

四、主に『漢武帝故事』などにみられる西王母にまつわる伝説·神仙説などをもとに、桃の木を仙木、桃の実を仙果として考える説をもって不老長生のシンボルと伝える民間信仰の根源であると説くものもある。

五、最後に、文字学や語源学から桃のシンボリズムの根底を説明しようとする研究がある。例えば、李時珍が「文字は木に従う兆であり、十億を兆というのは、その多いことを言ったものだ」といって、桃の生育·多産の信仰機能を説明し、また「桃とは凶を逃れしむる所以なり」(『左伝』孔疏引)とあるところから、「桃」は「逃」に通じるので不祥凶邪を払う信仰の根拠となるとする。日本語の場合でも、桃が百「モモ」と音通していると説かれている[7]。

氏は桃や桃太郎に関し、結論として折口信夫の説を引用して、日本における桃の信仰ないし「桃太郎」の話の発生を集団的に帰化してきた人々のあいだに行われた風俗·信仰に求めているのである。こ

[7] 王秀文(1998)「桃の民俗誌—そのシンボリズム(その一)」、国際日本文化研究所センター紀要、『日本研究』第17集

の意味で、「桃太郎」の話は決して一民族だけの伝承によって発生したものでなく、桃太郎の鬼が島のくだりにも、多民族の信念·信仰·憧憬がこめられて多元的に成立したものであろうという[8]。

三、桃太郎話とアニミズム

日本人の神観念については、諏訪春雄氏によると、縄文時代のころからその存在があきらかになり、弥生、古墳と時代が推移するにつれて変化し、さらに大陸からの仏教の渡来によって決定的な変質を受けた。その推移は次の四段階をたどったと見ることができる。

第一期　自然神信仰
第二期　精霊神信仰
第三期　祖霊神信仰
第四期　国家神信仰

自然神は主として縄文時代以前、精霊神は縄文時代、祖霊神は弥生時代、国家神は古墳時代以後に発生したカミガミであるが、もちろん、前期のカミは次の時代のカミと同居し、いりまじって、日本人の複雑なカミ信仰の世界をかたちづくっている[9]。

自然神信仰とは山川草木や動物などあらゆる自然物、人間の力を超えた超越的な存在そのものを、率直にカミと見る信仰である。菱沼勇氏は日本の自然神を大きく二つに分類して、一は地上の自然物を対象とする神々であり、二つは天上の自然現象を対象とする神々であるとする。第一の、地上の自然物を対象とする神々の種類は、実に多種多様であって、例をあげれば、山の神、木の神、森の神、石の神、泉の神、温泉の神、滝の神、川の神、海の神、島の神、蛇の神などがある。たとえば日本の最も起源の古い神社である『延喜式神名帳』に掲げられた神社を調べてみると、関東八ヶ国に十社あり、大和国だけでも二十社以上はあるという[10]。

精霊神信仰は精霊崇拝とも言い、アニミズム（Animism）からの

[8] 王秀文（1999）「桃の民俗誌―そのシンボリズム（その三）」、同上、第 20 集
[9] 諏訪春雄（1994）『日中比較芸能史』p、27、吉川弘文館
[10] 菱沼勇（1985）『日本の自然神』有峰書店新社

訳で、霊魂や気息を意味するアニマ（anima）からきた言葉であり、原始の古代人では人間の周辺にいる動物はもちろんのこと、山川、草木、岩石、湖沼、滄海など、自然のあらゆる事物の中に霊魂があるとする信仰である。これはイギリスの文化人類学者 E·B·タイラーが十九世紀の末葉、その著書の『原始文化』において唱え始めた学説であった。柳田国男は精霊にあたることばとしてタマ（霊·魂）をあげ、折口信夫は日本古来の霊魂観念をカミ、タマ、モノなどと表現した。また、この段階での精霊はものから遊離して動きまわるようになった。

祖霊信仰は祖先崇拝ともいう。しかし祖先という概念はかなり曖昧なものであり、人類、もしくは氏族の悠遠の始祖から最近の死者までさまざまな神霊が含まれている。祖先崇拝を簡単に言えば、先祖の霊を宗教的にあがめ、その加護を祈ることである。

祖霊信仰の発生は農業を中心とする社会と密接に関係がある。通説では日本の祖霊信仰はおそくとも弥生時代にすでに現れた。この時代には大陸の稲作農耕技術が伝来して比較的に生活が安定した定着農耕になり、定着度が高まるにつれて生活条件としての土地、家屋、共同労働、耕地の相続などの要素が整えられた。家とか家族とかの制度を生み、家の繁栄や永続を願うため祖霊信仰が生れるようになった。それに対し、縄文時代はまだ未開の社会で主に狩猟や、採集、漁労、焼畑農耕などが行われ、人々はすべて厳しい大自然に依存して生存していくため、山川草木、動植物、あらゆる自然現象に精霊があり超自然的なはたらきを有すると信じられる。もちろん、このようなアニミズムは縄文時代にかぎって見られるのではなく、弥生時代以後の祖霊信仰の時代にも共存するかたちで生き延びている。

自然神信仰は動植物や自然物をそのまま神と見て崇拝の対象にする。アニミズム（精霊信仰）はそれまでの自然神信仰を取りこんで、動植物のみではなく、自然のあらゆる事物のなかに精霊（神）があるという。祖霊神信仰は、基本的には人を中心とする始祖、先祖神

の信仰であるが、始祖が人間でない場合、必ず人間の姿をして現れるのは原則である。例をあげれば、硫黄島の太鼓踊りのメン、甑島のトンドン、屋久島のトシノカンサマ、石垣市の盆のアンガマ、八重山のアカマダ·クロマタ、宮古島のパーントゥなどの祭礼行事にあらわれる来訪神は祖霊神であり、特に硫黄島の太鼓踊りのメン、石垣島の盆のアンガマなどが明確に人間のかたちをとって、祖霊神のいちだんとすすんだ段階をしめしているのである[11]。また秋田県男鹿半島で大晦日（以前は小正月）に行われる「ナマハゲ」という民俗行事もそうである。菅江真澄の『男鹿の島風』には次のようにある。

> なまはぎはは正月十五日の夜に、身の毛もよだつようなおそろしい丹塗りの仮面をかぶり、ゆらみのというものを着た男が、手に鋭い刃物を持ち、小箱を背負い、その箱のなかには物を入れて、からからと鳴らし、叫び声をあげながら、家ごとにはいってくる[12]。

という。上述に対し、中国にも多くの例がみられる。たとえば、漢民族の祖先神たる伏羲と女媧は『山海経』（周·秦以来の古書）によれば、人面蛇身で、もともとは蛇であった。また、中国貴州省イ族の旧暦正月三日から十五日まで行われる「搓特基」という民俗行事に最初に登場する祖先神は猿人のようなかっこうをして現れる。その猿人は中国の民俗研究者·唐楚臣氏によれば、やはりトーテム神であった。同じく雲南省双柏県のイ族が正月の八日から十五日まで行う「跳虎節」とよばれる民俗行事がある。この儀礼は黒いTシャツに竹帽子、手に瓢箪を掛けている竹の杖をもった黒老虎頭子とよばれる老人と、虎のまだら模様を描いた黒い羊の皮を身につけた八人の虎人によって演じられる。同氏によれば、その虎は雲南イ族のトーテミズムの対象になる祖先神である[13]。

---

[11] 諏訪春雄（1998）『日本の祭りと芸能』p、162　吉川弘文館
[12] 高橋秀雄等（1992）『祭礼行事・秋田県』櫻楓社
[13] 唐楚臣（1994）「珍奇的化石－滇黔彝族《跳虎節》及《搓特基》」『雲南儺戯儺文化論集』雲南人民出版社

このように見てくると、アニミズム世界の思惟が自然のあらゆる事物の中にある精霊を中心とし、崇拝の対象にするのに対して、祖霊信仰世界の思惟は人間を中心、上位とする考えである。柳田国男氏は、妖怪について、

多くは信仰が失われて、零落した神々のすがたである[14]。

という著名な定義を下している。昔のアニミズム段階に信仰されていた精霊神がその信仰性を失って、落ちぶれていったものが妖怪とみなされるようになったという考えである。この説に異を立てる学者もいる[15]が、確かに妖怪の本質をついた概念といえる。『今昔物語』巻第二十七に「冷泉院水精成人形被捕語（れいせんのいんのみづのたまひとのかたちとなりてとらへらるること）」という一篇がある。冷泉院の池水の精が夜、三尺ばかりの小さな老翁に化身して縁側などに寝ている者の顔をなでたり、いたずらをしたりしたが、結局、勇士に捕縛され、水を入れた盥を所望したところ、その中に落ち込み、水になって溶け、姿が消えた話。話中の「池水の精」は元々は水の神であり、のち信仰が失われ妖怪に転落したと説明ができると思う。しかしここで注意すべき点は、すべての精霊神がその信仰が失われたあと妖怪になるのではなく、人間を助ければ従来の通りあがめられるが、逆にすれば、人間に危害をあたえれば妖怪に落ちぶれて行くということである。『太平広記』巻四百十七に、次のような話がある。

天宝中、趙生という人があり、最初は貢生（科挙）に受かったが、性おろかなのため、なかなか出世できない。ある日、まわりの人に笑われた彼は、思い切って多くの書籍を携えて山に入り刻苦勉励する。ところが凡愚のためなかなか思う通りにいかない。ある日、一人の老翁が現れ、趙生に、「あなたの強い向学心に感心している。わしは貴方の役に立つことはできないが、会うことが出来て本当に幸いである。」と話しかけた。趙生が老翁に出自を尋ねると、老翁は「わしは段氏子で、山の西の大木

[14] 柳田国男監修（1968）『民俗学辞典』「妖怪」の項、、東京堂
[15] 小松和彦（1982）『憑霊信仰論』p、210　伝統と現代社

のしたにすむ」と名乗って姿を消した。趙生は妖怪と怪しがっていたが、言ったとおりに山の西を訪ねると、一本の大きな椵樹があって、その木の下を掘り下げると、老翁の形になっていた一尺あまりの朝鮮人参をえた。その人参を喫した趙生は、その後勉強では他より抜きん出るようになって、ついに出世できた。

この話の木の精は、困窮した人間に手を貸し助力して、あくまでも神に近い精霊神であった。中国の漢·王充の『論衡』「訂鬼篇」に、

一曰、鬼者、老物精也。夫物之老者、其精為人。（あるいはいう、鬼は劫を経た化け物の精である。それ化け物の劫を経たものは、その精が人のふりをする。）

とある。この定義によると、人本位の信仰段階では精霊（神）の位置づけは明確に祖霊神系統の下に転落したのである。謡曲がその成立にあたって中国の「元曲」に影響をうけたのはすでに七理重恵氏によって指摘された[16]。謡曲の「高砂」の出典は元曲の「城南柳」とかなり密接な関係がある[17]。その「城南柳」の冒頭の楔子（序開き）に次のような文がある。

呂洞賓という神仙がある。師父鍾離の仰せにはこの岳州の城南に一本の老柳樹があり、すでに数百余年がたち、仙風道骨を有する。この老柳樹を得度させるために一人の墨売りに変装して岳陽楼をたずねた。この柳にはまことに仙骨（せんこつ）があるが、木石類の故、なんとしても神仙にはならない、必ずまず精を成して後、よく人となるべく、人となりて後、よく道をなすべし。

中国の道教は古くの民間信仰を土台として成立したものであり、その神仙思想に神仙になるためには、人間の場合は修行して道をえれば成し遂げられるが、動植物や自然物の場合は、“木石類の故、なんとしても神仙にはならない、必ずまず精をなして後、よく人となるべく、人となりて後、よく道をなすべし”というプロセスを取ら

[16] 七里重恵（1926）『謡曲と元曲』積文館
[17] 葉漢鰲（2000）『能楽と中国の古芸能・信仰』p、158　勉誠社

なければならない。即ち、

動植物·自然物　→　精（霊）→人間に変身　→成仙

ということである。

さて、桃太郎話はどうであろうか。桃太郎話の人物構成は、主役の桃太郎と脇役のぶち犬、猿、雉と、敵役の鬼からなる。桃太郎は植物の桃から生まれ、成長後、村のため鬼が島へ鬼退治に赴き、いわゆる英雄譚である。またその桃太郎の異常出生について、話によると“ある日、お婆さんが川で洗濯をしていますと、川から大きい桃が一つドンブリコッコ、スッコッコと流れてきました。”この大きい桃という表現に注意しておきたい。即ちその桃が通常の桃ではなく、非常に大きな桃であった。前述の『論衡』「訂鬼篇」:「夫物之老者、其精為人」、また『抱朴子内篇』巻十七·登渉篇にも「萬物之老者、其精悉能假託人形（劫を経た萬物はその精霊が悉く能く人形（ひとのかたち）に仮託する。）」があるように、その大きな桃は劫をへた精霊といえるだろう。そうすると、そのプロセスは

桃　→ 大きな桃（桃の精霊）→　人間に生まれ変わり　→　英雄という型になる。それで、脇役の犬、猿、雉については、話の筋によれば概ね、

犬　→　犬精（霊）、猿　→　猿精（霊）、雉　→　雉精（霊）

というように纏められる。最後の敵役の“鬼”は、話では“コノコロ　鬼ガ島カラ　鬼ドモガ　海ヲ　ワタッテ来テ、物ヲ　取ッタリ、人ヲ　コロシタリシテ、シヨウガ　アリマセンデシタ。”という内容を見てくれば、確かに柳田氏の言った通り、信仰が失われて零落した神々のすがたで、村人に加害を与えたため悪神、鬼であった。

四、桃太郎話と中国民間の魔よけ信仰

桃太郎話は日本のお伽話の中で一番親しまれている昔話である。桃太郎を知らない人はまずいないが、その話の背後にひそんだ意味はあんがい知られていない。桃太郎話はただ子供に面白く聞かせるためのものではなく、魔よけやこどもの健やかな成長への祈りが本

来の目的だと思われる。

前章にもふれたように桃太郎話の人物構成は、主役の桃太郎と脇役の犬、猿、雉、それから敵役の鬼が島の鬼からなる。なぜ、桃太郎なのか、なぜ、犬·猿·雉なのか、及び鬼が島の鬼にどんな意味があるのか、ここではそのそれぞれの人物について、民間信仰の視点から考えてみたい。

（1）桃の辟邪について

桃に関する研究は、第二章にも触れたように今日では多くの研究が重ねられ、しかも優れた業績をあげている。ここでは主にその古来の民間信仰においての邪気払いや、魔よけなどの信仰について考えてみたい。

許慎の『説文解字』によれば「桃」という字は「兆」からきた形声文字である。「兆」という字は、多く、始めなどの意味があり、桃の木に実を結ぶのは子孫繁栄の象徴である。また、同じく、「辶に従う兆」という逃の字があり、桃は逃に通じる。『左伝』服虔注には「桃弧棘矢、以除其災（桃弧棘矢を以てその災いを除け）」とあるから桃は不祥凶邪を払えるという。

中国では桃の信仰はいったい何時ごろからであったか？『漢書·礼儀志』には「代有所尚、周人木徳、以桃爲梗、言氣相梗。」とあり、これは漢代の人は陰陽五行思想に基づいての考え、一方、殷商の時代は桑を尊ぶのにたいして、周の時代は桃を尊ぶのであった。その後、基本には漢の所説を受け継いで今日まで伝わってきた。たとえば、後漢·王充の『論衡』「訂鬼篇」には、

> 三海経には又曰く、滄海の中に度朔という山が有（あ）る。その上に大桃木が有り、其の屈蟠（くつばん）すること三千里、其の枝間の東北を鬼門といい、萬鬼の出入する所なり。上に二神人有（あ）り、一は神荼といい、一は鬱壘といい、萬鬼の閲領を主（つかさど）る。悪害の鬼は執ふるに葦索を以てして、以て虎に食はしむ。是（ここ）に於て皇帝乃ち禮を作り、時を以て之を駆（か）り、大桃人を立て、門戸に神荼·鬱壘と虎とを畫き、葦索を懸け、以て凶魅を禦（ふせ）ぐ。

とあり、桃に辟邪の力があると物語っている。時代が下って六世紀長江中下流地域の年中行事、風俗習慣についてを記す宗懍の『荊楚歳時記』の正月の条「門の飾りと門神」にも、

> 画鶏を帖り、或は斲り五采を鏤め、及び土鶏を戸上におき、桃板を造りて戸に著く。これを仙木という。（中略）荘周を按ずるに云う。鶏を戸に掛くる有り。葦索を其の上に懸け、桃符を傍らに挿するあらば百鬼、之を畏ると。また魏の時、人、議郎董勛に問いて云う。今、正臘の旦、門前に煙火·桃神·絞索·松柏を作し、鶏を殺し門戸に著くは疫を逐うの礼なるかと。勛答えて曰う。礼、十二月室を索めて疫を逐うに、門戸を釁り、鶏を磔し、爟火行わる。故に作して行氣を助く。桃は鬼の悪むところ、画きて人首を作り、以て収縛するところあるべし。不死の祥なりと。又桃は五行の精にして、能く百怪を制す。之を仙木と謂う。
>
> （守屋美都雄訳注、東洋文庫『荊楚歳時記』参照、）

と見える。文中の「桃神」とは、桃の木の彫った人形を門の側におき、魔よけ、邪気払いにするのである。また、明の李時珍の『本草綱目』にも

> 引『典術』（三国時代ごろ成立）、桃は西方の木であり、五行の精なる仙木である。味が辛く気が悪く、故に邪気を厭伏し、百鬼を制する。

とあるように、桃には古くから邪気をはらい、百鬼を制するという辟邪の働きがある。その習わしとしては桃の枝や板を門につけたり、桃の人形を作って門に飾ったりして、或は桃の枝を以って桃湯にして風呂の中にいれたり、地に撒いたりするなど多種多様である。また民間の巫師も桃の枝より作った箒を魔よけ儀式の法器として使う。さらに、こういう信仰はのちの道教にも取り入れられ、桃印や、桃符、桃木剣などいずれも道士の法器として欠かせないものである。

中国民間の桃の魔よけ信仰は日本にも伝わった。『古事記』の創世神話の黄泉国の段に、次のような話がある。

女神の伊邪那美の神が火神の火之伽具土神を産むとき火傷を負

ってみまかり、黄泉国へ旅立って行った。夫の伊邪那岐神は妻の跡を追って黄泉国へ迎えに行ったが、女神はすでに黄泉戸喫を食べたので再び現し国へは帰れないが、一応黄泉国大神と相談して、その間ぜったい私を覗いてはいけないと言って奥の部屋へと入っていった。結局、男神が外で待ちかねタブーを犯して火を灯し、戸中に入って見ると、女神は全身腐って体に蛆が集まり、湧いていた。伊邪那岐神がひどく驚いて一目散に逃げ出すと黄泉醜女があとをおって来たので、黒鬘をとって投げると葡萄になり、櫛の爪を投げると筍になって醜女が葡萄や筍をとって食べるうちに逃げた。男神は黄泉比良坂のふもとまで逃げのび、そこにある桃子三個をとって投げつけると、黄泉醜女たちは皆逃げ帰った。

この桃の話について『日本書紀』には、より詳しく記している。

> 是時、雷等皆起追来。時道邊有二大桃樹一故伊奘諾尊、隠二其樹下一因採二其實一以擲レ雷者、雷等皆退走矣。此用レ桃避レ鬼之縁也。

とする。上述は日本の桃の邪鬼払い観念についてのもっとも古い記事であった。また、『延喜式』巻十二中務省の追儺の項に「時率二侍従内舎人大舎人一入而列立。未二伝宣一之前、以二桃弓葦矢桃杖一頒二充儺人一（事見儀式）」、同大舎人式の追儺に「親王已下執二桃弓葦箭桃杖一儺二出宮城四門一」とも見え、明らかに中国古代の大儺駆鬼儀式の踏襲であった。ほかに『今昔物語』二十七の二十三に、「今昔、播磨ノ国、□□ノ郡ニ住ケル人ノ死ニタリケルニ、其ノ後ノ拈ナド為サセムトテ、陰陽師ヲ呼籠タリケルニ、其ノ陰陽師ノ曰ク、「今某日、此ノ家ニ鬼来ラムトス。務々可慎給シ」ト、…門ニ物忌ノ札ヲ立テヽ、桃ノ木ヲ切塞ギテ□□法ヲシタリ。」なども見られる。民間の昔話でも、蛇の子を孕んだ娘は、三月の桃酒、五月の菖蒲酒、九月の菊酒をのんで、腹の中の蛇の子を溶かしたといい、また九月九日に桃の核を三角に削り、三月に縫った紅絹の袋に入れておくと、

雷よけになるという伝えもある[18]。さらに五月五日の端午の節句に飾る武者人形にも桃太郎が見られ、通説ではそれは健やかな力強い男子の成長と立身出生を願うとするが、もともとは疱瘡にかかった子どもの魔よけ、もしくはその撃退といった呪的な機能を擁していたという説もあった[19]。

（2）犬の辟邪について

古代の中国では、家畜の一つたる犬は門番としての役割のほか、魔除けという信仰にもひろく使われていた。『唐月令注』十二月の条に、

命二有司一大磔。旁磔以送二寒気一。磔謂磔二犬於門一。…所以扶レ陽抑レ陰之義。

即ち、十二月は有司に命じて大いに磔して、旁（あまね）く磔り、寒気を送り出す。磔とはいわゆる犬を門に磔にする。…これ以って陽を扶け、陰を抑えるという意味である。また『風俗通義』にも

太史公記：「秦德公始殺狗磔邑四門，以禦蠱菑。」今人殺白犬以血題門戶，正月白犬血辟除不祥，取法於此也。（『史記・封禅書』には「秦徳公が始めて犬を殺し城の四門に磔け、これ以って疫癘を祓う。」今人白犬を殺し、その血を以って門戸に書き付け、正月に白犬血で不祥を取り除き清めるのはこれに基づくのである。）

とある。これに対して、江頭廣氏は古代中国における犬の信仰上の用途についてを次のように纏めている。

一、　賢士を選ぶ儀式に用いる。
二、　祭祀に用いる。
三、　風を止めるに用いる。
四、　邪気を除くに用いる。
五、　道祖神を祭る。
六、　子が生れて三日目に邪気を払う。
七、　詛に用いる。

[18] 大野晋等校注（1967）古典文学大系『日本書紀上』p、98 注 7、岩波書店
[19] ヤン·ヘリンク（1988）「桃太郎再発見」、『江戸児童図書へのいざない』

八、 求雨に求める。

九、 占に用いる。[20]

三、四、六項は言うまでもなく魔除け信仰に立脚するのであり、一、二、五、七項はおもに血霊信仰に基づくものと考えられる。血霊信仰とは血液に血霊が宿り、不思議な力があると信ずる信仰である。古代では祭祀、または結盟の際、牲(にえ)を殺し、その血を共飲する儀式を通して関係者や結盟者の同心を固め、同一族や同一集団の意を表すのである[21]。

犬の血をもって化け物の退治や、妖術を破るのは血霊信仰を前提にした呪法であり、すなわち血にその動物の魂が宿っているからだと信じられるのである。例えば、名高い道教小説『封神演義』第九十回「子牙捉神荼鬱壘」という章に、梅山七聖の“桃精”“柳鬼”などの化け物の妖術を打ち破るため、姜子牙が桃椿、犬血などを以てその精怪を退治する、など枚挙に暇がない。

犬の魔よけ、厄払い信仰は日本にも広く見られる。例えば古くからの犬張子という信仰はその例である。犬張子とは犬の立ち姿の張り子細工の郷土玩具。京阪地方では東犬(あずまいぬ)と呼ぶ。室町時代から公家の産室の守りに、お伽犬または犬筥(いぬばこ)といって筥型の張子のイヌをおいて伽をさせた。現在でも皇室では行われている。民間に普及されたのは江戸後期頃からしく、嫁入り道具にも加えられ、雛壇にも飾られた。イヌは幼児を守り、悪魔よけになると信じられ、縁起ものとして東京では、男児出生後３１日め、女児 33 日めの宮参りに、親類縁者から犬張子にでんでん太鼓を麻で結びつけて贈る風習があった[22]。

それで犬を呪物としての絵姿神札にも見られ、発札の神社は異なっても、いずれも盗難除け、疫病除け、狐つき落としなどの効験を語っている[23]。

---

[20] 江頭廣（1992）『古代中国の民俗と日本』p、272　雄山閣
[21] 王孝廉（1996）「血霊信仰」『神話·信仰与儀式』p、45　稲郷出版社
[22] 大塚民俗学会編（1972）『日本民俗事典』　弘文堂
[23] 野本寛一（1989）『軒端の民俗学』p、94　白水社

（3）猿の辟邪について

中国宋代に成立した『虎鈐経』には「猴(さる)を厩に畜(か)えば馬のために悪を避け、疥癬を去る」とある。これについて、明の商濬編の『稗海』には晋の趙固の馬、病みしを郭璞の勧めにより猴と馴れしめて癒えたと詳らかに書いてある。このように中国古くから猿により魔除けができると信じられてきた。これに対して、日本の例では天保十四年（一八四三）刊行の『駿国雑誌』に次のような記事がある。

> ♪鎌倉の御所のおにはて小しゆろがしやくをとる　酒よりさかなより小しゆろがめにつき十三と、猿牽云、此歌を歌ひ猿に衣装を着け、摺鉦を抉撲き、柏子とりて舞はす也。外に管と絃とを鳴らさす。猿は牝を養て馴しむ。その食餌は飯或は菓を用ゆ。正五九の三月、厩(うまや)に詣り、勝膳経を読誦して舞はしめ、祈祷をなせり。是馬に病災なからしむる也。又小児痘瘡を病ざる已前、猿と盃すれば必軽し。人猿を迎えて祈祷する時、神酒、初穂の銭、白米、幣に用ゆる白紙を出して是に与ふ…。

また、折口信夫の『壱岐民間伝承採訪記』の「疫病よけ」の項にも次のような記述がある。

> 疱瘡が流行すると、佐賀辺からすぐ、ささのさいぞうのお札を持って配りにくる。ささのさいぞうには、お札と人形がある。人形を持っている家は、時々ある。裃つけて笹をかたげた人が、前に猿をかかえた姿である。お札のは猿を引いている。今もこんな唄が残っている。「ささのさいぞう猿ひきつれて　疱疱たやすく伽なさる…」。

なお、大正三年に文部省が発行した『俚謡集』には、福岡県三井郡の「猿廻し唄」として次の歌詞が紹介されている。

> お猿が山行は　熊本の爺さん疱瘡のお払ひ　五穀長者お俵こかし…。

こうして見ると、猿の辟邪について日本の民間にも疱瘡や疫病に

対する猿の呪力が強く信じられていたことがよく分かる[24]。

（四）雉の辟邪について

『集韻』には「雉、或作二鴙・鵅一」とある。鴙について、『廣雅、釈鳥』には「鴙、野鶏也。」と解釈する。こうして見ると、雉は即ち野鶏であり、鳥である。

鶏に対する信仰について、まず『荊楚歳時記』に記された例をあげることができる。その正月の「門の飾りと門神」の条に次のような記事がある。

> 画鶏を貼り、或は斲(き)りて五采を鏤(ちりば)め、及び土鶏を戸上におき、桃板を造りて戸に著(お)く。…荘周を按ずるに云う。鶏を戸に掛くる有り。葦索をその上に懸け、桃符を旁に挿するあらば百鬼、之を畏ると。又魏の時、議郎の董勛に問いて云う。今、正臘の旦(あさ)、門前に煙火・桃神・絞索・松柏を作し、鶏を殺し門戸に著くは疫を逐うの礼なるかと。…

文中の画鶏とは門戸に鶏を画いたものを貼る風習であるが、その初めは絵を貼るのではなく、鶏を殺してそれを門戸にぶら下げたのであろうという説もある[25]。さらに後漢の應劭の『風俗通』巻八「雄鶏の条」に

> 今人、卒かに鬼刺痱悟(ひご)を得らば、雄鶏を殺し以って其の心の上に伝う。賊風を病む者は鶏散を作る。東門の鶏頭、以て蠱を治むべし、此に由って之を言えば、鶏は主として以て死を禦ぎ、悪を辟くるなり。

とあり、即ち鶏は魔除け、疫病を払い、死を防ぎ、悪を避ける力があるという信仰である。

日本では野本寛一氏の報告によると、静岡県の遠州地方にはかつて鶏の巣箱を家の出入口の鴨居の上、入口の軒下に据え付ける風習があって、氏の説によると、玄関の上に鶏の巣箱を置くことは、鶏に家の内と外の境界を守らせ、外から家に侵入せんとする邪悪なも

[24] 同上、p、59
[25] 守屋美都雄訳注（1978）東洋文庫『荊楚歳時記』p 11、平凡社

のを防ごうという意味である[26]。

五、むすび

桃太郎の話の構成は桃太郎（桃）、犬、猿、雉、黍団子、鬼が島の鬼などの要素からなる。桃、犬、猿、雉などについて、ここまで考察してきたようにいずれも魔除け、疫病払いに強い呪力があると信じられてきた。そのほかに話の主人公の「桃太郎」はなぜ“童子”でなければならないか。この問題について、今までは前に紹介されたように柳田氏が日本古来の小神童信仰、いわゆる「小さ子物語」と関連があると説明しているに止まる。この説に対し、やや物足りないと私は思われる。童子でなければならない理由はやはり童子に魔除けの働きがあることを看過できない。王充の『論衡·訂鬼篇』に

> 世謂二童子一為レ陽、故妖言出二於小童一。童巫含レ陽、故大雩之祭、舞レ童暴レ巫。雩祭之禮、倍レ陰合レ陽、故猶三日食陰勝、攻二社之陰一也。

と記されている。即ち中国古代の陰陽五行思想によれば、童子は陽に属し、陽気を持っているので雨乞いのような大祭の時は童子を舞わせたり、巫女を日に晒したりする。雨乞い祭の礼は陰気を助長して陽気を調和するもので、日食は陰気が陽気に勝つものなので社の陰気を攻撃するのと同じ考えである。このように見てくると、桃太郎話の主な内容は桃太郎が鬼が島の鬼を退治するのであるが、その陰と陽との属性について纏めてみれば、

1、桃太郎は「桃」は魔除けの効力があるほかに「桃太郎」自体が童子であるので陰陽五行思想でいえば陽に属する。

2、鬼が島という場所について、巌谷小波の桃太郎では「元来此日本の東北（うしとら）の方（かた）、海原遥かに隔てた処に、鬼の住む島が御座ります。」とし、つまり鬼が島は日本の東北方にあるという、これに対し中国の陰陽五行思想では東北の方角は鬼門であり、陰に属するには言うまでもない。

---

[26] （注）23 に同じ、p、92